ENCYCLOPEDIA NIPPONICA 2001

日本大百科全書

ENCYCLOPEDIA NIPPONICA 2001

18

にほんけ―はな

小学館

ENCYCLOPEDIA NIPPONICA 2001

日本大百科全書　18

©SHOGAKUKAN　1987

昭和62年11月1日　初版第一刷発行

定価 7,800円

編集著作
出版者　相賀　徹夫

発行所　小　学　館

郵便番号　101
東京都千代田区一ツ橋2－3－1
振替　東京8－200番
電話　編集・東京03－230－5620
業務・東京03－230－5333
販売・東京03－230－5739

印刷所　凸版印刷株式会社

本　文
(特抄百科用紙)　王子製紙株式会社

口　絵
(特抄アート紙)　三菱製紙株式会社

表　紙
(特製クロス)　ダイニック株式会社

製　本　凸版印刷株式会社
若林製本株式会社

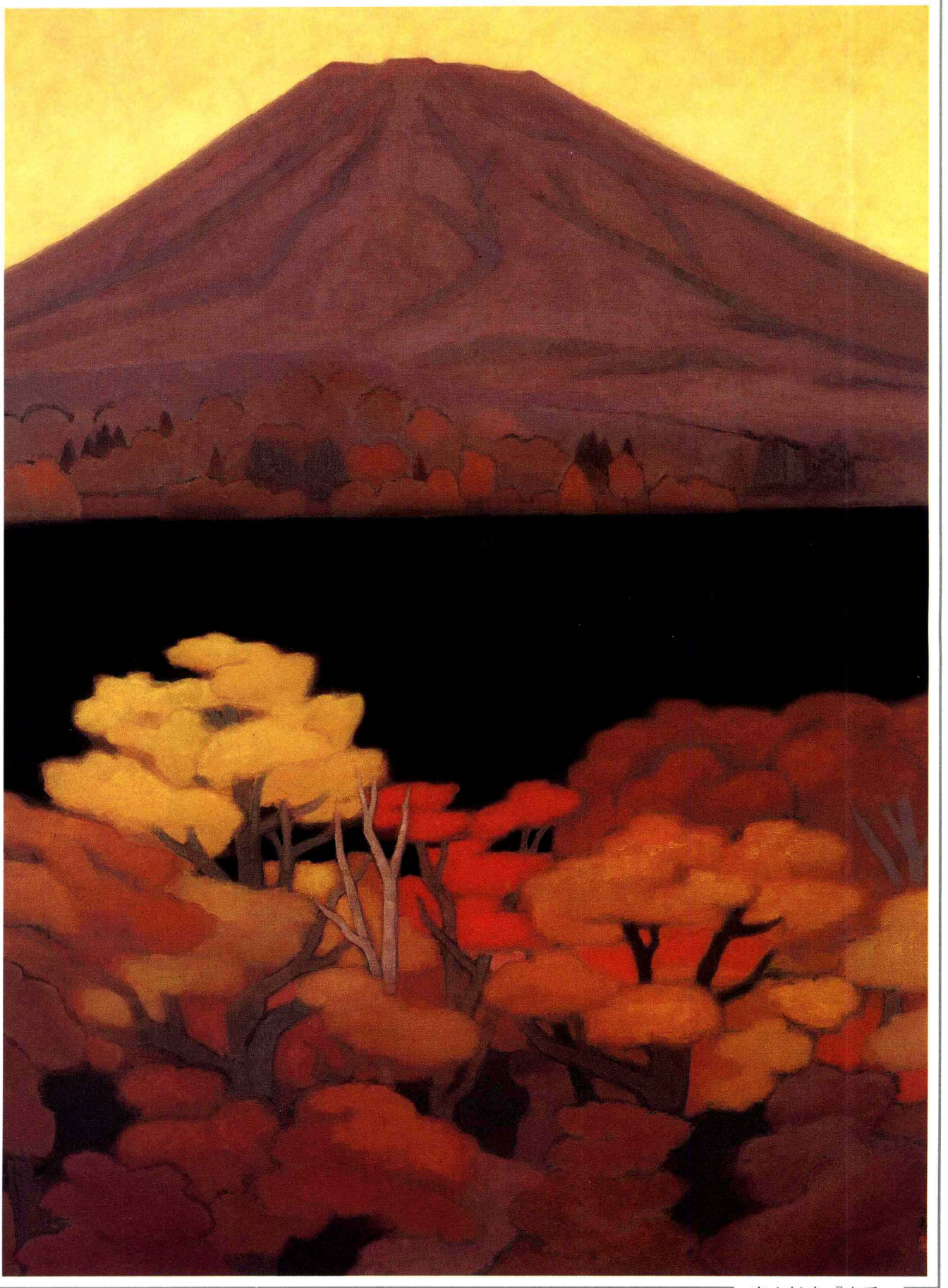
＊本書に掲載した日本関係地図は，国土地理院発行の2万5千分の1地形図，5万分の1地形図，20万分の1地勢図を使用したものです。

＊造本には十分注意しておりますが，万一，落丁・乱丁などの不良品がありましたら，おとりかえいたします。

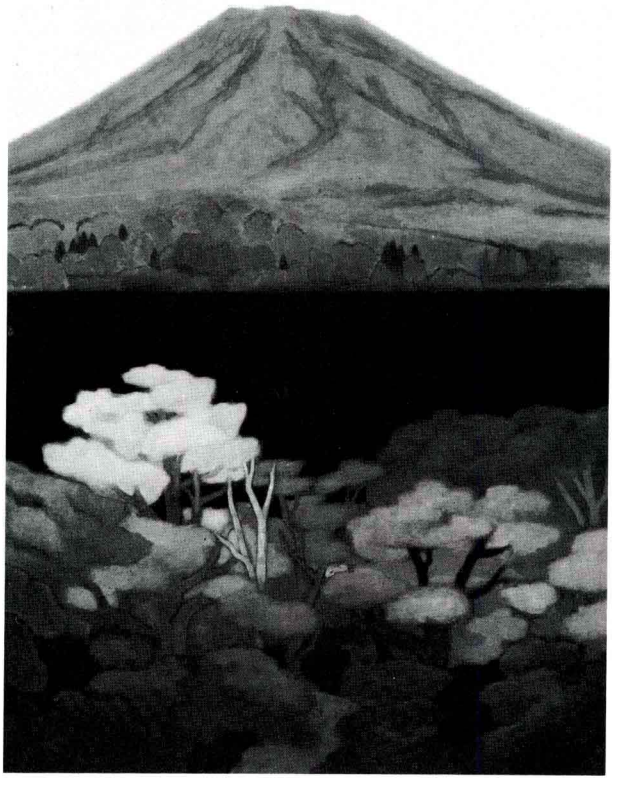
＊本書の内容の一部または全部を，無断で複写複製(コピー)することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版者の権利の侵害となりますので，その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

ISBN4-09-526018-1



東山魁夷『光昏』



東山魁夷画『光昏』
1955年（昭和30）179.0×129.0cm
（日本芸術院）

金色の空、逆光の暗紫色の山、
夕影の中にある紅葉の樹々。
黒々とした湖面。
光と昏さ、華麗と重厚。
（東山魁夷・文）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

環境のもつ知性

わが幼時を振り返り、家庭にどんな書物があったかを思い出してみれば、私が知的な環境に育ったとは、到底いうわけにいかない。父の固有の蔵書といえば、釣魚、囲碁、謡曲に関するものがほとんどであったからである。中学生のころ、父が学校時代に使ったドイツ語で書かれたドイツ語の教科書を見つけ出し、無謀にもそれを勉強しようと企てたぐらい、人一倍好奇心の強かった私のことであるから、専門書どころか、大きな百科事典でもそろっていれば、理解できるできないにかかわらず、きっと強い反応を示していたことと思う。長じて、学者の家庭に育った学者をひそかにうらやむ気持ちをもつに至ったのも、むりはなかった。

スウェーデンの知人カイ・ジーグバーンは、七歳のとき父親がノーベル物理学賞を受けた(一九二四)が、毎日朝食のコーヒーを飲みながら、その父親から物理の話を聞いて育ち、自身ものちに父に近い専門分野でノーベル賞を受けた(一九六一)。家族の知的な雰囲気を吸収しながら著名な学者になった人は、イレーヌ・ジョリオ・キュリー、それにわが国の湯川、朝永両博士など、その数は少なくない。

環境のもつ知性は、単に家庭内にとどまらず、もっと広い地域に決定的な影響を与える。一例として、二〇世紀最大の科学的成果といわれる量子論や相対論の確立の経緯を眺めれば、それらが当時のヨーロッパの知的環境全体に負うところが多かったことが知れる。そのころベルリン大学には、プランク、アインシュタイン、ラウエらがおり、チューリヒ工科大学にはシュレーディンガー、デバイ、パウリらがいた。ゲッティンゲンにはボルン、ハイゼンベルク、コペンハーゲンにはボーア、ケンブリッジにはディラック(以上いずれもノーベル賞受賞者か、または、のちに受賞した人たち)がいた。しかもこれらの学者は、師弟関係、あるいは同じ教授職の前任者と後継者の関係などにより、たがいに密接に結ばれていた(たとえば、シュレーディンガーはチューリヒのアインシュタインの教授職の後継者、またその後ベルリンでは、プランクの講座の後継者)。当時ベルリンでは、これら一級の物理学者が毎週集まってコロキウムをしていたそうである。そのころの科学の壮大な急展開の背景に、ヨーロッパのこのような知的雰囲気が存在していたことは疑いをいれない。

これらの学者は、たがいに頻繁に行き来している。たとえば、ハイゼンベルク、ディラック、パウリもコペンハーゲンにいたことがあり、ボルンがケンブリッジにいたこともある。シュレーディンガーがいちばん長く仕事をしたのはダブリンであった。このような地理的環境の変化の自由さが重要であって、ノーベル財団のラメル総長は、長期の経験から、受賞者の経歴を分析してみて、自分の出身地の「ホーム、スウィート・ホーム」でひとりよがりの仕事をした人よりも、他の環境で新たなスタートをした人のほうが、より創造的であるといっている。考えさせられる言葉である。若いころ海外に留学する機会を逸した私には、顧みて忸怩たるものがある。

福井謙一

(福井謙一)

装　丁　亀倉雄策
本扉／書　青山杉雨（連作書体のうち、元時代の墨跡書法）
巻頭口絵　東山魁夷
本文五十音題字　木元壽美江

にほんけ

日本経緯度原点　にほんけいいどげんてん　東京都港区麻布の国土地理院関東地方測量部の構内にあり、日本の経緯度の原点としてあらゆる測量の出発点となっている。測量法施行令第二条では原点の数値を次のように定めている。

経緯　東経一三九度四四分四〇秒五〇二〇

緯度　北緯三五度五九分一七秒五一四八

原点方位（鹿野山一等三角点の方位）　一五六度二五分二八秒四四二

ここは、明治の初年に海軍観象台の子午環が設置された地点の中心で、日本で初めて天文学的に経緯度が測られた点であり、その後は長く東京天文台が位置した場所である。子午環は戦災にあい焼失したが、その地点は原点として現在も保管されている。写→地図　〈尾崎幸男〉

日本経営者団体連盟　にほんけいえいしゃだんたいれんめい　Japan Federation of Employers' Associations　日経連と略称される。労働組合に対応する経営者団体の全国組織。一九四七年（昭和二二）関東経営者協会を中心として経営者団体連合会が結成され、それが翌四八年四月に改組されて現在の日経連になった。地方別経営者団体と業種別経営者団体によって構成されている。労働争議、団体交渉、労働法の解釈など労働問題への対応について経営者側の団結を図り、全般的な方針を示したり指導したりすることを主目的とする。また政府に対して、労働問題に関する政策提言や意見具申も行う。近年の活動のなかでもっとも顕著なものは、春闘に際して賃上げのガイド・ラインを示すものであり、生産性基準原理（名目賃金上昇率を労働生産性上昇率と等しくすべきとの考え方）は有名である。経団連、商工会議所、経済同友会とともに、財界四団体を構成し、労働問題への資本側の立場を代表し、対策の中枢となっている。　〈森本三男〉

日本軽金属（株）　にほんけいきんぞく　アルミ業界最大手で製錬から加工まで携わる唯一の一貫専業会社。正しくは「にっぽん～」。一九三九年（昭和一四）設立。四〇年から四三年にかけて蒲原（静岡県）、新潟、清水（静岡県）の三工場を建設し、アルミナからアルミ地金までの一貫生産体制を確立した。四八年（昭和二三）に第二次世界大戦末期から停止していた原料ボーキサイト輸入が再開し、戦後のアルミ本格生産がスタート。五二年にはカナダのアルミニウム・リミテッドと提携。五〇年代末から六〇年代初めにかけて加工分野で系列会社を拡大するとともに、副原料、商事、不動産部門で一連の子会社を設立した。六〇年代にはボーキサイトの安定確保のため、マレーシアやオーストラリアの企業に出資。七四年、製錬から加工品までの一貫生産体制確立のため日軽アルミを合併。石油ショック後は加工部門の拡大に力を注いでいる。資本金は約二五四億円（一九八六）。苫小牧（北海道）など一一工場をもつ。　〈橘川武郎〉

日本経済新聞　にほんけいざいしんぶん　東京都・大阪市の日本経済新聞本社ならびに西部（福岡市）・名古屋支社が全国的規模で発行している日本の代表的日刊経済新聞。一八七六年（明治九）一二月二日、三井物産を主宰していたわが国海外貿易の先覚者益田孝により『中外物価新報』（週刊）として創刊。八五年七月に日刊となり、八九年一月二七日『中外商業新報』と改題し、経済、財政記事のほか内外一般ニュースも報道するに至った。一九二四年（大正一三）末、大阪でも発行を始め、以来経済専門日刊新聞として発展を続けたが、四二年（昭和一七）戦時中の新聞統合により『日刊工業新聞』『経済時事新報』両社を合併、そのほか一一業界紙を吸収して『日本産業経済』と改題、このとき大阪版は廃刊した。

第二次世界大戦後の一九四六年（昭和二一）三月一日から『日本経済新聞』に改題、以後、日本経済の高度成長とともに飛躍的に紙勢を伸ばし、内外の通信網の整備に努め、紙面の充実を図る一方、大阪、西部をはじめ全国的に現地印刷を広げた。さらに業界の先頭を切ってコンピュータ導入を進め、七二年一月オンライン一貫処理の日経全自動新聞製作システム（ANNECS）を完成。また同年五月からNEEDS－IRシステムによる記事情報サービスを開始、総合情報産業として発展を続けている。本紙のほか『日経流通新聞』『日経産業新聞』『The Japan Economic Journal』（英文日経）、『日経会社情報』などを発行している。発行部数は朝刊二三九万五九〇〇部、夕刊一三八万〇四〇〇部（一九八六）。系列に出版社日経マグロウヒル社などがある。→中外商業新報　〈高須正郎〉

題字

参日本経済新聞社社史編集室編『日本経済新聞社百年史』（一九七六）・日本経済新聞社）

日本経済連盟会　にほんけいざいれんめいかい　一九二二年（大正一一）八月に結成された財閥資本を中軸に据えた総合的資本家団体で、経済団体連合会（経団連）の前身。略称経済連盟。全国商業会議所連合会の国際商業会議所への加盟問題を直接的契機として、日本銀行総裁井上準之助、三井合名理事長団琢磨らによって組織された。会員は団体会員、法人会員、個人会員の三種からなり、団体会員には日本工業倶楽部、東京・大阪銀行集会所、大日本紡績連合会などの資本家団体が加盟し、法人会員には三井合名、三菱合資、住友合資、安田保善社など四大財閥をはじめ、資本金五〇〇〇万円以上のおもな大資本が加盟した。会員数は三〇年（昭和五）には六四九会員（団体一三、法人一六五、個人四七一）となり、昭和初期の経済政策にかかわる独占資本の意志決定機関としての位置を占めるようになった。四六年（昭和二一）五月に解散し、同年八月、現在の経済団体連合会に再組織された。→経済団体連合会　〈竹内壮一〉

参堀越禎二編『経済団体連合会前史』（一九六三・経済団体連合会）

日本芸術院　にほんげいじゅついん　芸術上の功績顕著な芸術家を優遇するための栄誉機関で、文部大臣が所管する。現在は院長のほか会員一〇〇人余で組織され、第一部（美術・工芸・建築＝定員五六）、第二部（文芸・評論＝定員三七）、第三部（音楽・演劇・舞踊＝定員二七）に分かれている。会員は終身制で年金が支給され、新会員は部会の推薦によって文部大臣が任命する。

一九〇七年（明治四〇）に発足した文部省主催美術展覧会の美術審査委員会がその母体で、一九一八年（大正八）新たに帝国美術院を設立、森鷗外を院長に美術家一三名を会員に任命した。三七年（昭和一二）には帝国芸術院となり、文芸・音楽・演劇の分野に会員を増やし、第二次世界大戦後の四七年（昭和二二）に日本芸術院と改称された。その美術部門は五七年まで帝展・文展に引き続き日展を運営し、官展の主催者として美術界に大きな影響を与えた。四一年から芸術奨励のため功績のあった者に毎年日本芸術院賞を贈ることが定められ、四九年以降は、そのもっとも優れた者に日本芸術院恩賜賞が贈られている。東京都台東区上野公園一―三〇にある。　〈永井信一〉

日本毛織（株）　にほんけおり　羊毛紡績の最大手。正しくは「にっぽん～」。一八九六年（明治二九）神戸の石炭・石油商川西清兵衛（一八五五―一九四七）らによって設立された。一九〇七年（明治四〇）モスリン製造と羊毛トップの自給に乗り出し、梳毛から織布まで一貫生産を開始、また日本毛糸紡績を一三年（大正二）に設立してトップ生産を行った。他社の不振のなかで順調な成長を遂げ、二七年（昭和二）には人絹部門に進出したが、のちに倉敷絹織に製造権を譲った。第二次世界大戦後も専業メーカーとして成長し、五六年（昭和三一）アルゼンチンに現地法人を設立して海外進出、五八年には合繊混紡糸の生産を開始する。製品は、各種毛織物、毛布、カーペットなど二次製品が大半で糸売りは少ない。資本金六四億円、売上高六〇〇億円（一九八七）。　〈田付茉莉子〉

参日本毛織株式会社編・刊『日本毛織六十年史』（一九五七）

日本劇場　にほんげきじょう　劇場名。通称日劇。東京・有楽町に一九三四年（昭和九）一月開場。ニューヨークのロキシー劇場を模したショー、レビューのための劇場として財界人の出資で建設された。客席一～三階、客席数約二六〇〇の大劇場で、当初は日本映画劇場株式会社の経営であったが、翌年東宝に合併。東宝は、男女混成の専属舞踊団、のち日劇ダンシングチーム（NDT）を備え、都会的な感覚のレビューやロッパ一座、エノケン一座などの公演をかけ、宝塚歌劇とは違った大人向けのショーやレビューをつくろうとした。戦後は、ジャズやロ

カビリーなどの音楽ショーと映画の併映で人気を集めたが、レビュー人気の低下と都心再開発の要請で、八一年（昭和五六）二月一五日閉館、取り壊された。〈水落　潔〉

日本犬　にほんけん　哺乳綱食肉目イヌ科に属する家畜イヌのうち、日本土着の立ち耳、巻き尾または差し尾をもつ品種の総称。犬種団体（日本犬保存会、ＪＫＣなど）が現在認める日本犬は、秋田犬、北海道犬、紀州犬、四国犬、甲斐犬、柴犬の六犬種である。ほかに、土着ではないが日本を原産国とする品種としては、チン、日本テリア、土佐闘犬、日本スピッツなどがあるが、これらは日本犬とはよばない。

〔歴史と用途〕日本にもイヌ科の野生種としてニホンオオカミが生息したが、これは日本犬の先祖とは考えられていない。日本犬の先祖は、人の移住につれて日本へ渡来したとみなされている。日本最古の家イヌの化石は、神奈川県などの貝塚で発掘され、九五〇〇年ほど前のものといわれている。日本犬は主として獣猟犬として、中形のものはクマ、シカ、野生イノシシ猟に、小形のものは小獣、鳥猟などに用いられてきたが、西洋犬種のように体形に著しい人為的影響を及ぼすような作出はなされず、むしろ自然のままに飼育されてきた。

〔保存〕長い歴史を有する日本犬であるが、大正時代に入るまでは特別に保存しようという運動もおこらなかった。西洋犬種の渡来は一五八三年（天正一一）にすでにみられ、外国との交流がしげくなるにつれてしだいにその数を増し、在来種との交流も進んだ。とくに明治時代になると、闘犬の流行もあって雑化は急速に進んだ。身近に見慣れた在来種より、珍しい西洋犬に人々の目がひかれた結果、徐々に純度の高い日本犬は姿を消していった。しかし、数が少なくなってようやく保存運動がおこり、一九二八年（昭和三）日本犬保存会が設立され、血統台帳の作成や、品種の保存と改良が本格的に行われるようになった。

かつて日本犬には、全国各地にその土地の名をつけられた多くの系統がみられた。文部省は純度の高い在来種を文化財として天然記念物に指定し保存を図った。日本犬種のうち天然記念物の指定を受けた品種には秋田犬（一九三一年七月指定）、甲斐犬（三四年一月）、紀州犬（三四年五月）、越の犬（三四年一二月。絶滅とみなされる）、柴犬（三六年一二月）、四国犬（三七年六月）、北海道犬（三七年一二月）がある。

〔現状〕現在、日本犬は品種として固定され、根強いファンを有している。第二次世界大戦後、秋田犬はアメリカ合衆国西部に渡り愛好者を増やした。最近は小形の柴犬の海外進出もみられ、日本犬のなかで飼育数、輸出数ともその伸びが著しい。前述の六犬種のほか、かつてはマタギ犬なども存在したが、現在はごく少数が愛好者に飼育されているにすぎず、戦後多少みられた岩手マタギは中形犬のなかに吸収されたとみられる。このマタギ犬の衰退には、専門猟師の減少のほかにドッグショーが関与していると思われる。犬種団体はかつては日本犬を大形、中形、小形と分け、地域色を重視しなかったため、ドッグショーの上位入賞を目ざして、中形どうしなら北海道犬と四国犬とか、紀州犬と四国犬といった異系交配がなされたことがある。中形に入るにはサイズが大きすぎ、大形には不足のマタギ犬はショーでは不利で、自然に中形犬のなかに吸収されたようである。

小形犬である柴犬にも、信州柴のほか山陰小形などがあったが、現在の柴犬はほとんど信州柴の系統である。しかし、地域的には山陰小形もまだ飼育されている。最近は異系交配は影を潜め、各地方色豊かな犬種がそれぞれ一犬種として認められている。山陰小形にも復活の道は残されていよう。また、岐阜・愛知地方には、戦前から美濃柴といわれる小形犬がいた。この美濃柴は、短胴のものがみられること、毛色が独特の緋赤のものが多いこと、舌に黒斑をもつものが出ることなどから、その純度を疑われ公認犬種にはなっていない。しかし、遺伝子構成上は紛れもない日本犬の一系統とされるものであり、信州柴に押される山陰小形ともども貴重な在来種といえよう。そのほかの小形犬種としては、薩摩犬、四国小形もみられなくなっている。〈増井光子〉

〔渡来経路〕前述のように日本犬は、古い骨からみてニホンオオカミ（すでに絶滅した）から家畜化されたのではないと考えられている。その理由は、古い日本犬の骨は小形であったのに対し、ニホンオオカミの骨は、大形であったことである。

近年、イヌの血液に含まれている種々のタンパク質の型について生化遺伝学的に調べられ、その型を支配している遺伝子の構成比率の犬種間の違いについてコンピュータを使って分析が行われた。その結果、血液タンパク質型を支配している遺伝子構成が、日本犬種と西洋犬種とは著しく異なっていた。日本犬種のなかでは、北海道犬は台湾の高山地方の在来犬種と近かった。また北海道犬を除く日本犬種の遺伝子構成は、韓国の在来犬種である珍島犬と多くの類似性がみいだされた。このことから、日本国土には初め南方から入った古いイヌがいて、その後朝鮮半島から新たにイヌが入り、この両者の混血により現在の大部分の日本犬種の祖先がつくられたと考えられた。北海道犬では、この混血がほとんど行われなかったと推定された。このような日本犬の起源は、日本に先住民族として縄文人がおり、その後朝鮮半島を経て弥生人が渡来したという、人の歴史との関連が注目される。北海道のアイヌが古い型のイヌをもっており、これが現在の北海道犬になったと考えられる。↓イヌ　〈田名部雄一〉

田名部雄一著『犬から探る古代日本人の謎』（一九八五・ＰＨＰ研究所）

日本原子力研究所　にほんげんしりょくけんきゅうじょ　⇨原子力研究所

日本建築　にほんけんちく

〔日本建築の変遷〕先史時代／飛鳥・奈良時代／平安時代／鎌倉時代／室町・桃山時代／江戸時代
〔日本の近代・現代建築〕西洋建築移植時代／欧米追随からの脱皮／分離派と日本のＣＩＡＭ／国粋主義の風潮／現代

日本建築は伝統的には中国建築の一支流として位置づけられ、木造建築が主流を占める。したがって柱や梁など直線的な材料で組み立てた構造となるが、中国建築の多くが木材の露出部を彩色するのに対し、日本建築では白木のままを基本とするなど、中国とは異なる特質を有している。

一方、西欧諸国など外国の建築はれんが造や石造のものが多く、それらは壁を主体とする面的な構成をとるのに対し、日本建築では線的な構成となる。入口や窓などの開口部を例にとれば、日本建築ではその上部に楣とよぶ水平材を置くが、外国のそれでは湾曲するアーチでせり上げるのが通例である。いわば日本建築は組立て式であり、西欧諸国の建築は積み上げ式である。日本は古くから建築用木材に恵まれていたが、巨材を挽く鋸がなく、製材上の工具に難があったため、もっぱら木目に楔を打ち込んで裂き割る方法がとられた。そのため、平滑に裂けやすく耐用年数も長いヒノキが多用された。室町時代中期に大鋸が用いられるようになり、各種木材の製材が容易になったが、それまではほとんどの用材がヒノキで占められていた。マツは中世以降、各所で多用されるようになったが、スギは軟らかいため主要材とはならず、近世以降に住宅の用材として利用されている。

日本建築の変遷

〔先史時代〕わが国の建築もまず住居から始まるが、先土器時代は岩陰や洞穴が住居に利用されており、木材を一部組み立てたような住居は縄文早期の竪穴住居に初例がある。これは日本の各地でつくられたが、地面に穴を掘り、その上に屋根をかぶせた単純なものであった。

竪穴住居に次ぐ建築としては、弥生前期に出現する高床倉庫がある。竪穴と違って高床の建築は地上に高くつくられるので、建物内は乾燥し、倉庫のみならず、弥生後期には住居としても建てられるようになり、古墳時代へと至る。弥生時代の高床倉庫は、伝香川県出土「袈裟襷文銅鐸」（国宝）の棟持柱のある印刻や、奈良県田原本町唐古遺跡出土土器の箆書などによりその形が知られる。

一方、古墳時代の高床建築は奈良県河合町佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡に図示されている。この鏡は四世紀後半のもので、高床の一つは屋根が切妻造の倉庫、いま一つは入母屋造の住居を示している。このほか入母屋造の竪穴住居や平地住居も表現されており、後者はおそらく掘立て柱の住居と考えられる。

古墳時代の建築では、奈良県天理市東大寺山古墳出土の環頭大刀の柄頭が竪穴住居を表しており、また、各種の建物の形式は家形埴輪によって知られる。これらは大別すると住居と倉庫に分かれるが、住居でも格式の高いものは棟に鰹木をのせている。また、破風を棟上まで延長したような千木や、垂木を棟で交差したような千木が表現されたものもある。

竪穴住居を復原した例は静岡市の登呂遺跡など各地にみられるが、これらの構造については、江戸時代の冶金書『鉄山秘書』に記述されている中国地方の砂鉄精錬の高殿とよばれる小屋の構造が参考にされている。→竪穴住居

高床倉庫については登呂遺跡や静岡県韮山町山木遺跡から構造部材が出土し、また、愛媛県松山市古照遺跡、福岡市湯納遺跡、三重県津市納所遺跡などでも新例が知見されている。竪穴住居や高床倉庫の柱は地面に穴を掘り、柱根元を埋め込んで立てた掘立て柱で、根元が土で固められるため、独立した柱でも固定される。わが国の建築では、古くは掘立て柱が主流で、屋根も草葺きの簡単なものであった。『古事記』には、志幾の大県主の住宅が鰹木を棟にあげているのを雄略天皇がみつけて、天皇の御舎に似ていると怒り、焼き払うように命じたことが記されているが、群馬県赤堀町茶臼山古墳から出土した八棟分の家形埴輪は、主屋が切妻造の屋根に鰹木を飾り、ほかに切妻造の付属屋二棟と小屋一棟、切妻造の高床倉庫三棟、寄棟造の高床倉庫一棟からなる。鰹木のある住居はまさに宮殿であり、これらの埴輪群を通して前方後円墳に葬られた当時の豪族の家屋構成がうかがわれて興味深い。→高床住居

わが国の神社建築は、このような伝統を継いだものと思われる。古代の人々は、神が降臨する場所を特異な地形地物に求めて、そこを神の依代として崇め、世襲された宝物を祖神の霊代として祀り、それを格納する倉庫が神殿に変化したのである。そのため高床建築の形をとり、切妻造として、棟上には宮殿に倣って鰹木が飾られた。御舎は御在所、宮は御屋、祠は穂倉の転訛したものという。こうしてみると、神の御在所となる神殿は、まさに御屋と穂倉の合成されたものといえよう。→神社建築

〔飛鳥・奈良時代〕六世紀中ごろの仏教伝来後、本格的な寺院建築として飛鳥寺が五九二年（崇峻天皇五）に起工された。この工事にあたっては百済から寺工が来日しており、在来の掘立て柱の建物とはまったく違った、基壇を築き礎石を据えた上に柱を立てる礎石建ちの工法がとられた。柱の上には複雑な組物がのって桁を受け、さらに屋根には瓦が葺かれ、加えて天空高くそびえる仏塔も建立された。それは従来の直線的な造形の素朴な建築に比べると、非常な技術的格差であり、飛鳥の人々はこの想像もできなかった建物の出現をみて、仏教建築のすばらしさに驚嘆したに違いない。わが国の正統的な仏教建築は、この飛鳥寺の堂塔をもって嚆矢とし、従来の日本の建築様式に大陸の建築様式が加えられることになった。今日では飛鳥寺の外観なども明らかでないが、現存する法隆寺西院伽藍の前駆的なものが飛鳥寺であったと推定されている。

法隆寺西院伽藍の建築の特徴は、俗に徳利柱とよばれる胴膨らみのある柱、雲斗栱の組物、そして隅組物は一方向だけ突出し、軒は一軒で、高欄の中備には人字形の割束が用いられるなどで、後世のものとはまったく異質の様式をもつ。これは魏晋南北朝など中国の古いいろいろの建築様式が朝鮮半島を経由する間に混合して伝わり、飛鳥時代のわが国で、それに新しい様式が付加したものと解釈されている。ここでいう新様式とは、飛鳥寺の建築に始まった飛鳥様式が、六世紀末から七世紀にかけて技術的に発展し、丸垂木から角垂木へと変化し、隅扇垂木が指垂木へと移行したような構造的進歩をさす。このころ、すでに飛鳥様式と異なる大陸の隋唐の建築様式が日本に入っていたが、法隆寺は聖徳太子ゆかりの寺として、基本的には旧様式の飛鳥様式を踏襲したと考えられる。

新しい大陸様式である隋唐の建築様式は、川原寺の建築あたりから導入されたと考えられる。川原寺は積極的に中国文化を取り入れた天智天皇（在位六六一～六七一）が官の大寺として建立した寺院で、当時これと並行して罹災した百済大寺の再建も行われており、新しい様式が導入される素地があった。両寺とも現存しないので不明の点が多いが、現存する薬師寺東塔（七三〇）によって当時の建築を類推できる。すなわち、薬師寺は初め藤原京につくられ、七一〇年（和銅三）の平城京遷都とともに他の大寺とともに新都に移されたが、その際旧藤原京の伽藍をそっくり再現したのであった。

八世紀になると、都は藤原京から平城京へと移って造宮造寺が盛んになり、官の組織として造宮省や造寺司が設置され、建築工事が発展する。藤原宮以前の宮殿建築は在来の掘立て柱建築であったが、藤原宮では宮城を画する門や、国政の中心である朝堂院の一郭は大陸の建築様式を取り入れて礎石建ち、瓦葺きの建築となった。仏教建築とともに渡来した大陸の建築様式は、宮殿建築にも適用されるようになったが、平城宮のように宮城内に多数の建物を配するには、すべて礎石建ちとするのは不可能で、天皇の居所の内裏は伝統を重んじて掘立て柱の建物とし、官衙の建物もほとんど掘立て柱の在来工法が踏襲されている。寺院でも伽藍中枢部は礎石建ちであったが、付属建物は掘立て柱で、いわばモニュメンタルな建物が礎石建ち、瓦葺きとして建造された。

奈良時代には、また新しい建築様式が導入されている。たとえば奈良盛期の遺構である唐招提寺金堂の場合、軒を受ける組物の三手先斗栱の二手目が横に連結され、また軒下は横の連結材（支輪桁）を利用して小天井と支輪が張られるなど、それまでの建築とは明らかに異なった形式をみせている。奈良時代の造寺は前記のとおり官の組織によって行われたため、この新しい建築様式への一元化が進んだ。『続日本紀』には大安寺の建設に携わった僧道慈が建築の技術に優れていたことが記されており、道慈は入唐修業中に建築技術を修得したものと思われる。奈良時代から一元化された建築様式は、こうした入唐僧によってもたらされ、それが国分寺の建設を通して各地に伝わったものとみられる。

ところで、奈良時代には、一方において和風化が促進されるようになった。すなわち、仏教建築は本来礎石建ちで屋根は瓦葺き、床は土間であったが、東大寺法華堂にみられるように、床を板張りとした建物が出現し、屋根も柿葺き、檜皮葺きの仏堂が多くなった。とくに山地に営まれる仏堂には、このような和風化されたものが多かったようである。また法隆寺東院伽藍のように、中心の堂である夢殿と、講堂に相当する伝法堂が礎石建ちの瓦葺きで、他の回廊や七丈屋は掘立て柱で檜皮葺きの建物として建てられるなど、和風と大陸様式の折衷構成をとるものもあった。

仏教の儀式も大陸伝来のものに従っていたが、やがて日本式の礼法によるようになり、礼拝空間に板敷きが求められた。また本来、仏堂は仏だけの場、いわば仏を祀る大形の厨子的な扱いがなされていたが、仏を礼拝するための礼堂が仏堂に付設されることになり、仏堂の前面の庇が礼堂に利用されたり、さらに前面に別棟の礼堂が建てられるなど、双堂の形態をとるようになった。このように奈良時代は、日本の風土に適応した仏堂が建てられ始めた時代でもある。

〔平安時代〕七九四年（延暦一三）都は平安京に移るが、平城京の諸大寺はそのまま奈良にとどめ、新都では東寺、西寺の二寺だけを設けた。この二寺の造営は従来の様式の踏襲であったが、入唐して密教を学んだ最澄・空海が新たに天台・真言の宗派をおこしたことにより、密教に基づく建築がつくられるようになった。それまで仏塔は九重・七重・五重・三重のものが建てられていたが、密教の影響を受けて建てられたのが多宝塔である。→多宝塔

一方、延暦寺の常行堂もこの時代に建設されたが、この建物は方五間堂で屋根の頂部に如意宝珠をのせた宝形造で、これも多宝塔と同じく平安時代になって初めて出現したものである。前面の庇を礼堂のように扱った奈良時代の建物には、唐招提寺金堂があるが、平安時代になると、東寺の金堂や食堂のように、前面庇のさらに前面に孫庇を設けて、そこを礼堂としたため、仏堂の奥行が四間から五間へと、一間深められるようになった。孫庇の多用も平安建築の特徴にあげられよう。

このような平面の変化とともに、構造にも変化が生じた。中国では七八二年（建中三）につくられた南禅寺大殿で、肘木形を通肘木上に現し、部材を一木化することが試みられていたが、わが国では九五二年（天暦六）に完成した醍醐寺五重塔で、丸桁の下に実肘木を一部造出した一木化が試みられ始めた。その後この傾向は高まり、現存するものでは一一七一年（承安一）の兵庫県一乗寺三重塔に、南禅寺大殿のような部材の一木化が認められる。一方、日本のような雨量の多い多湿性の風土では、建物の保存上、雨に対する対策が考慮されねばならなかった。まず、雨はけの面では、屋根の勾配が強められた。古代の建築は、たとえば母屋では、新薬師寺本堂のように屋根裏の垂木がみえるものや、あるいは唐招提寺金堂のように天井が張られるものがあったが、庇は一般に天井が張られず、屋根裏の垂木をそのままみせる、いわゆる化粧屋根裏天井となっていた。したがって、屋根の勾配を強める方法として、屋上に屋根を重ねるような形がとられた。このような屋根を野屋根とよぶが、法隆寺大講堂（九九〇再建）の屋根がその初期のものとして知られる。

野屋根ができるようになると、庇の化粧屋根の勾配は、雨の流れに関係がなくなるので、勾配を緩くすることが可能となり、側柱を高くすることが考えられた。これは採光の点では有利で、建物内を明るくする効果を生み出した。また、化粧屋根と野屋根との間の空間を利用して軒先を支持するために桔木が入れられるようになり、桔木の存在により軒の出が深まるようになった。屋根の勾配を強めること、軒の出が深まること、両者とも雨仕舞にはきわめて有効であり、加えて床張りの建物では床下の通気が図られるようになって、建物の保存に好影響を与えることになった。

これはまた、建物の外観をも変えることであった。屋根が高まり、側柱も高くなって、全体として建物は立ちが高くなった。床張りの建物では周囲に縁が回されるので、それが土間床の建物の基壇のように建物の足元を引き締める意匠的効果をもたらした。また、従来は建物を地上の湿気から防ぐことを考慮して基壇が高められていたが、床下の通気が容易となって、高い基壇は省略されるようになった。奈良時代から平安時代になって、仏堂は風土に適した日本的な建物に変わっていったのである。

一方、平安時代は、八九四年（寛平六）に遣唐使の廃止が行われてから大陸との公的な交流がなくなり、奈良時代以来の建築様式が日本的な発展をみたともいえる。前述の、構造面では部材の一木化が認められる一乗寺三重塔においては、側回りではかつて醍醐寺五重塔のように二段に組み上げられていた三手先組物が、上段には通肘木を入れて構造強化が図られているし、また組物間の中備に入れられていた間斗束が撤去されて、意匠を考慮して本蟇股が入れられている。中備に本蟇股が用いられるのは平安時代からで、これも新しい発展といえよう。このように、奈良時代に唐から伝来された建築様式が平安時代を通じて日本的に発展したものを、和様の建築様式とよんでいる。

多宝塔や常行堂から出発した宝形造の阿弥陀堂は、平安時代の特色ある建物の一つであるが、それとともに庇や孫庇を利用した礼拝空間を設けた仏堂が、内陣・外陣を構成する奥行のより深い本堂形式の建物に発展する。その発生的なものとして現存するのが永暦二年（一一六一）の棟木銘をもつ当麻寺本堂である。この堂はこれより早い平安初期に、孫庇の礼堂をもつ仏堂として建設されたが、礼拝空間の整備が図られ、内陣・外陣を構成する本堂に改められたもので、あたかも内陣・外陣が双堂の造合いの軒部分を省略して並べたような形を示している。大屋根の小屋組みはこの双堂部分の棟に大梁を渡して組み立てられており、野屋根がさらに発展した形をとる。一一五〇年（久安六）に建設された高野山金剛峯寺金堂は、内陣・中陣・外陣を構成し、仏堂の前に礼堂を並べた形式であるが、仏堂の側柱を礼堂の柱とつなぐ大梁を入れることによって省略し、そこを中陣としていたことが古図から知られる。これにより大梁を連続して架けることによって柱を省略する手法が、中世以前にすでに試みられていたことがわかる。

ほかに平安時代の建物としては、現存しないが寝殿造の住宅がある。奈良時代の庶民の住宅は平城京の宅地の発掘調査によって、掘立て柱建物であったことが知られており、宮殿建築でも居住用のものはやはり掘立て柱建物が主流を占めていた。また、現在は仏堂風に改められ礎石建ちになっているが、解体修理時の調査によって、奈良時代の高級貴族住宅の唯一の遺構とみられる法隆寺東院伝法堂は、当初は掘立て柱であったかもしれない。そして、奈良時代の住宅は、他の住宅跡の発掘調査例からみても、宅地にそれぞれ独立して建物が建てられるのが一般的であった。これに対して寝殿造の住宅は各建物が廊で連なり、互いに連絡が図られていた。これは、内裏の殿舎配置を祖形にしてそれを簡略化したものと推測されるが、中央に正殿としての寝殿を建て、その左右に対称的に対屋を配するのが基本であった。しかし、現実には対の一方が対代として小規模につくられたり、あるいは一方が省略されて対称性が崩れるものが多かった。初期の寝殿造の貴族住宅の形態については判然としないが、一二世紀の寝殿造住宅のようすは絵巻物に写実的に描かれているので大概は知られている。そして高級貴族の寝殿造をさらに簡略化したものが、下級貴族や釈家・武家の住宅へと及んでいったと思われる。これらの住宅では、仏堂に用いられた扉のほかに、蔀や遣戸が多用されており、建具の種類が豊富になってきたことが知られる。→寝殿造

〔鎌倉時代〕日本建築の中世は、源平争乱で一一八〇年（治承四）に焼失した南都東大寺および興福寺の復興から始まるが、これに際し新しく中国の大仏様、禅宗様の建築様式が導入され、日本建築は著しく発展した。大仏様は、東大寺の鎌倉復興に尽力した俊乗房重源が、宋の建築様式を彼なりに解釈した様式であった。彼は東大寺の早急な復興のため、大量生産が可能なように部材を標準化し、建物の強度を図るために各柱は貫で連結した。また、屋根は野屋根をつくらず、勾配の強い屋根とし、軒も一軒とし、軒の隅は扇垂木として放射状に収めたのである。この様式は和様に一部取り入れられ、新和様として主として奈良地方に広く普及した。→大仏様建築　→新和様建築

続いて禅宗が布教されるに伴い、宋直輸入の建築様式がわが国にもたらされた。この様式は軸部に比べ組物を小さくして柱上の台輪に並べ、組物に組まれた尾垂木は内部は持送りとして母屋を支えるなど、まったく新しい構造原理を取り入

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本建築

日本建築は古くは掘立て柱の建物で，それが発展するのは，大陸から寺院建築の工法が伝えられてからである。軒を深めるために柱上に組物を置き，一手・二手・三手と手先を増やし，垂木をかける桁を出桁として前に出し，さらに軒先は飛檐垂木をつけて地垂木と二軒にした。この三手先も8世紀には薬師寺と唐招提寺で変化がある(①②)。

平安時代中ごろになると雨はけをよくするために屋根の勾配が強められ，それとともに軒の垂木を化粧垂木とし，その上に野垂木をかけるようになる。化粧垂木と天井上の見え隠れ部分を野小屋という。8世紀末の新薬師寺本堂と10世紀末の法隆寺大講堂の断面をみれば，その差が歴然となる(③④)。

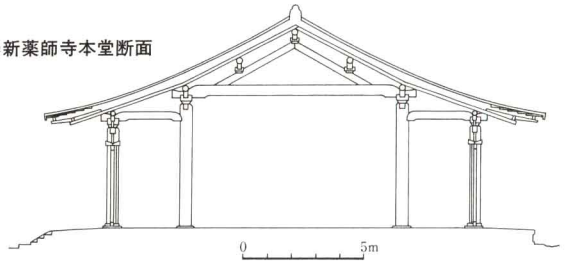
一方，野小屋の発生により12世紀になると，当麻寺本堂のように奥行の深い建物の建設が可能となった。野小屋の中に梁を二重三重に組み，棟を高め，一つの屋根に収めたからである(⑥)。

中世になると新しい建築様式として，大仏様や禅宗様が中国から移入され，建築構造がさらに発展する。とくに注目されるのは柱をつなぐために貫を入れたことで，構造強化が図られた。また，垂木を正福寺地蔵堂のように放射状に配すなど，在来の手法の和様にない工法がもたらされた(⑦⑧)。貫の木鼻の飾りもその一つである。やがて，和様と大仏様・禅宗様が渾然と入り混じり，折衷様が主流となる。

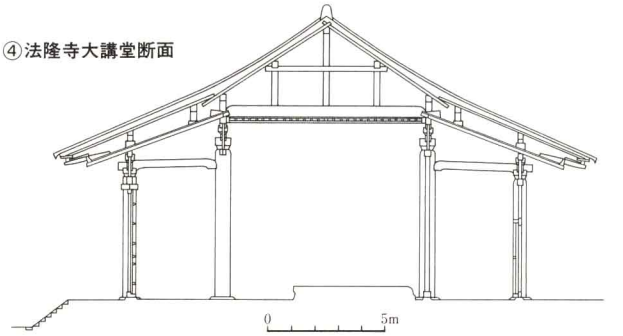
近世には装飾化が流行し，組物に彫刻が入れられ，随所に極彩色が施される。建物本体の部材の比例や構造の美しさが省みられず，彫刻と彩色で競うようになる。このような華麗な建築は領主の権力の誇示として建てられたが，やがて新勝寺三重塔のように庶民信仰の結露として寄捨による建物も現れる(⑨)。

明治になってからは，品川灯台などお雇い外国人による洋風建築が建てられ，また，国立第一銀行や開智学校など，在来の大工による擬洋風建築も出現して，日本建築も多彩となる(⑩⑪⑫)　〈工藤圭章〉

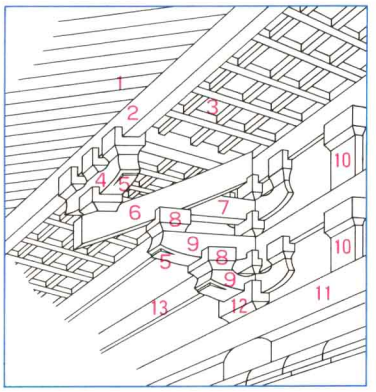
③新薬師寺本堂断面



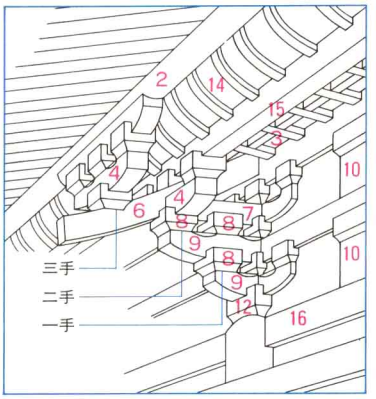
④法隆寺大講堂断面



①薬師寺東塔三手先

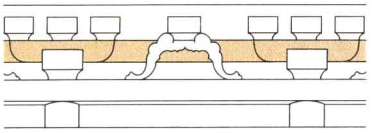


②唐招提寺金堂三手先(復原)



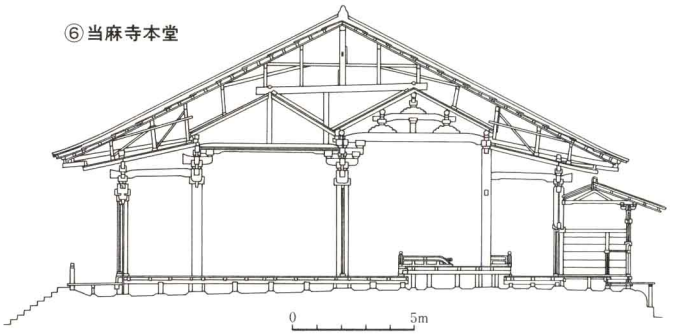
1 地垂木
2 丸桁(出桁)
3 小天井
4 秤肘木
5 舌
6 尾垂木
7 力肘木
8 斗
9 肘木
10 間斗束
11 台輪
12 大斗
13 通肘木
14 支輪
15 支輪桁
16 頭貫

⑤一乗寺三重塔組物



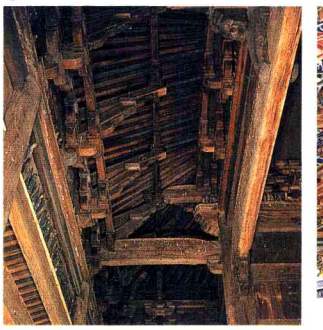
平安時代以降は，それまで別木でつくられていた部材を，一木でつくるようになる。この塔では肘木を通肘木のように一木とし，大斗上は表面に肘木形をつくりだしている。中備の蟇股はこの材に張り付けとなる

⑥当麻寺本堂



⑦

⑧



⑦⑧正福寺地蔵堂（国宝）　東京都東村山市

⑨

新勝寺三重塔(重文)　千葉県成田市

⑩

品川灯台（重文）　愛知県明治村

⑪

国立第一銀行（錦絵）

⑫

開智学校（重文）　長野県松本市

れたもので、入側柱と側柱をつなぐ繋梁も海老虹梁として高さを違えて連結するなど、新機軸を生み出した。これが禅宗様であり、やがて大仏様や禅宗様の長所を和様に応用して、これらが混然と一体化された折衷様が確立される。折衷様は、どの部分を和様、どの部分を禅宗様とするかは、構造・意匠とも造営にあたった技術者が独自に決定したので、かつて和様で一元的な構造であった日本建築も多元的になり、建物ごとに個性のあるものが出現した。そしてまた、鎌倉時代は幕府の行政が安定したため、技術者の交流も京・鎌倉と五山の大寺の造営に伴って頻繁に行われ、建築技術が全国的に安定して伝播するようになった。栃木県鑁阿寺本堂、山梨県大善寺本堂、福井県妙通寺本堂、和歌山県長保寺本堂、広島県明王院本堂、香川県本山寺本堂、愛媛県太山寺本堂など、近畿地方以外でも各地に特徴ある名建築が建立された。↓禅宗様建築　↓折衷様建築

〔室町・桃山時代〕室町時代になると、鎌倉時代に発達した折衷様が主流となり、また、禅宗建築では禅宗様を主体にした建築が建てられ、多様となる。ただし、大仏様は新和様に吸収され、折衷様のなかに生かされて、純粋な和様と同様に、大仏様として存続することがなくなったのである。

室町後期はいわゆる戦国の世で、中央集権が崩れて各地に戦国大名が領国を制するようになると、技術者の全国的交流は閉ざされて、建物にも地方性が現れるようになる。なかでも和泉（大阪府）、紀伊（和歌山県）の各地では装飾性を強調し、細部に彫刻・彩色を施すものが現れ、次代の桃山時代の華麗な建築の源流的なものが、地方色として狭い範囲で普及する。一方、戦国の世の習いとして室町末期から城郭建築が発展し、物見のために多重の櫓が建設されて天守閣の発生をみる。城郭は防備を主とした軍事的な建築であるが、一方では領主の権威の誇示のため壮麗なものが建てられるようになり、とくに織田信長が琵琶湖南岸に建設した安土城は、壮大な天守閣の先駆けとなった。↓城

城郭の建設には社寺建築の技術者を直接必要としなかったが、規模が壮大になると彼らの技術を必要とした。また、臣下との面接のほか使節の接待の場でもあった城郭内の居館は格式高く優美な室内意匠を凝らし、欄間や金碧画などで飾りたてたので、建築技術者以外に、画師、彫刻家の参加も得て、建築が総合芸術の所産として評価されるようになった。そして、居館の主室には床・棚・書院や帳台構など座敷飾りが整えられ、書院造として確立した。豊臣秀吉が一五八七年（天正一五）に建設した聚楽第は書院造建築の粋を尽くしたもので、門なども彫刻で飾られ華麗な彩色が施されていた。このころの建築美をとどめるものでは、豊臣秀吉の霊廟豊国廟の遺構と伝えられる滋賀県竹生島の都久夫須麻神社本殿や、宝厳寺唐門が著名である。このような建築の先駆的なものが、前に触れたように和泉・紀伊の神社建築にもみられるが、それらがこの時期に桃山建築として開花した。一六〇七年（慶長一二）完成の京都北野天満宮本殿・拝殿や宮城県大崎八幡神社本殿・拝殿はその代表的なものである。後者には紀伊の大工刑部国次が参画しており、続いて完成をみた宮城県瑞巌寺本堂では、大崎八幡神社の棟梁であった山城（京都府）の中村吉次がこれにあたり、紀伊熊野から用材が運ばれるなど、技術者や用材の交流が図られ、東北地方でも近畿と同等のものが建立されたのである。

〔江戸時代〕江戸時代になっても、建築には華麗さが珍重された。一六一七年（元和三）に建立された静岡県久能山東照宮本殿では組物に丸彫りの彫刻が用いられ、同じころ建立された江戸増上寺の徳川家康の尊像を祀った安国殿（第二次世界大戦で焼失）では、尾垂木先が獣頭の彫り物になるなど、建築の構造材を彫刻化することが始められている。部材の彫刻化など多彩になると、湾曲する尾垂木や拳鼻がついた変化の多い禅宗様が好まれるのが当然で、和様とも禅宗様ともつかない折衷様が主流を占めるのである。一方、純粋の禅宗様も京都の大徳寺、南禅寺、妙心寺など禅宗伽藍の造営にあたって採用されるなど、近世になってまた違った発展をみている。しかし、禅宗寺院にあっても伽藍周辺に営まれた塔頭寺院では、本堂に方丈が利用され、和様を主体とした住宅風の建築が建てられている。

近世初期に発達した書院造は、一面装飾性の強い豪華なものであったが、江戸時代に入ると繊細さを旨とする書院造が出現する。それは茶室に始まる数寄屋建築の影響を受けて面皮柱が使われ、壁も聚楽壁や錆壁が塗られる。これらの座敷では、床・棚・書院などに銘木・珍木が珍重された。一六一五年ころ（元和年間）から造営された桂離宮の書院群や一六五六～五七年（明暦二～三）建立の曼殊院書院や西本願寺黒書院は、数寄屋風書院の好例である。↓書院造

近世になると、また黄檗宗の伝来に伴って、黄檗様の建築が造営された。長崎では一六四四年（正保一）から崇福寺の伽藍が黄檗様で建設されている。この寺は、同じ長崎の興福寺、福済寺とともに、長崎在住の福州人の寺院として開かれた寺で、両寺に開創当初の建築が残らないこともあって、崇福寺の建築群は明末清初の中国建築のおもかげを残すものとして注目される。一六六二年（寛文二）には京都万福寺の造営が行われ、以下黄檗様は黄檗宗の布教により全国的に広まり、静岡県宝林寺本堂のように地方にもこのころの優品が残っている。

江戸時代を通じて社寺建築は折衷様が主流を占め、細部装飾が発達した。とくに彫り物が多用されて壁面を飾るようになり、建築そのものより彫刻の美が建築の価値を高める変則的な結果をもたらした。彫刻や漆・彩色で飾られる建築は日光の東照宮社殿や大猷院霊廟など関東で盛行し、関西では比較的少ない。ほかに関東では埼玉県歓喜院聖天堂、群馬県妙義神社、千葉県新勝寺三重塔・釈迦堂が著名であり、幕末期のものには静岡浅間神社の社殿が知られている。

一八五八年（安政五）アメリカほか四か国と修好通商条約を結んでから、開港場に居留地が設けられ、洋風住宅が建てられ始めた。長崎の旧グラバー邸や旧オルト邸が明治以前に建てられたものとして現存する。居留地の住宅は外国人の指導のもとに日本人の大工がつくったもので、日本建築としてはまったく新しいタイプのものであった。それまでは都市というと城下町が主で、そこには武家住宅と商家が区画された。武家住宅は書院造の簡略化されたものであり、商家は塗屋造のものが多く、とくに耐火を考慮して土蔵造のものまであった。一方、農村では農家はそれぞれの地方の特色をもち、きわめて保守的な平面と構造を伝えていた。したがって、当時すでに建築の種類は多種多様であった。

明治になると日本人独自の手になる擬洋風建築が始められ、現存するものでは一八七五年（明治八）に建設された長野県の開智学校が有名。当時公共建築は洋風建築に倣ってつくられたが、窓回りはアーチ状に木枠を組み、建物の隅はコーナーストーン風に木組をみせたり、漆喰を塗り上げて、写実的に処理した。明治になって実際に海外で建築学を学んで帰朝する者が出現するまで、在来の大工が見よう見まねで洋風建築を建てており、一八六八年（慶応四）の築地ホテル館や一八七二年の国立第一銀行などは、錦絵を見ると、当時の擬洋風建築を如実に現していて興味深い。

〈工藤圭章〉

日本の近代・現代建築

〔西洋建築移植時代〕明治の指導者たちは、欧米の圧倒的に優越した文化に直面して、産業技術や軍備などを早急に摂取する必要を痛感した。彼らにとって西欧化と近代化は同義語であり、明治維新後の近代社会に対応する新しい建築課題にまず対応したのは、いわゆるお雇い外国人の技師や建築家で

あった。これらの明治初期の建築はおおむねヨーロッパ一九世紀の折衷主義とよばれる様式で、この古めかしい様式を否定するところからヨーロッパの近代建築は始まったのであるが、日本の場合はむしろその折衷主義が近代化への母体となった。それには、幕末諸藩によって開かれた諸工業、製鉄所や造船所、紡績所などの諸施設が洋風建築の先駆となっており、長崎製鉄所（一八六一）や大浦天主堂（一八六五）などはその例である。維新政府は諸藩の諸施設を受け継ぐと同時に、新規に産業設備を設ける必要から多くの外人技師を雇い入れ、林忠恕、立川知方、朝倉清一らが補佐した。一八七三年（明治六）にはイギリス人ダイエルらが工学寮の教師として来日し、本格的な工学教育が開始された。

こうした外人技師の残した初期の作品としてはイギリスのウォートルスの泉布観、イタリアのカペレッティの遊就館があるが、もっとも日本に影響を与えたのはイギリス人のコンドルで、鹿鳴館（一八八三）、岩崎久弥邸（一八九六、現存）、三井家倶楽部（一九一三）などがある。

一方、民間の棟梁・職人あるいは官公庁の下級技術者たちは、依然として日本的伝統の小屋組みを応用し、内外の意匠はコロニアル・スタイルといったいわゆる擬洋風（開化式）建築を生み出した。これは一八七二年の学制頒布を機に小学校や役場の建物として全国的に波及した。中込学校（佐久市）、睦沢学校（甲府市）、開智学校（松本市）、済生館病院（山形市）などが現存するが、このスタイルは明治二〇年代以降は影を潜める。

工部大学校造家学科の設置は一八七九年であるが、そこでコンドルの教育を受けた辰野金吾、片山東熊、曽禰達蔵、佐立七次郎、同時代アメリカで教育を受けた妻木頼黄、フランスで学んだ山口半六ら本格的日本人建築家が明治二〇年代から活躍を始めた。辰野の日本銀行本店（一八九六）、妻木の横浜正金銀行（一九〇四）、片山によるネオバロック風の赤坂離宮（一九〇七）は明治を代表する記念碑的建築である。

〔欧米追随からの脱皮〕これより先一八九一年の濃尾地震はれんが造の建造物に大きい被害を与え、外国建築をそのまま導入することの危険を教えた。この教訓と一九〇六年（明治三九）のサンフランシスコ大地震から学んで、佐野利器を中心に耐震耐火構造の鉄筋コンクリートや鉄骨造が積極的に取り入れられるようになる。新時代を象徴する鉄材の応用は、いち早く鉄道橋や造船の分野に試みられたが、建築への利用の先例としては秀英社工場（一八九一）があり、これは造船技師若山鉱吉の設計によるパイプ構造である。オフィスビルとしては銀座黒沢ビル（一九一〇、黒沢貞次郎設計）、三井物産横浜支店（一九一二、遠藤於菟設計）があり、また鉄骨とれんがの混構造で帳壁（カーテン・ウォール）の祖形となった佐野の丸善書店（一九〇九）がある。

議院建築（帝国議会議事堂）の建設は明治政府の重要課題であったが、一九一〇年にその建築準備委員会が開かれ、討論会で、次代を担う建築家から国民的様式の確立について提案がなされた。討論の結果は不毛ではあったが、こうした議論がもたれたこと、そして設計案を公募するなど、模倣と習得の時代が終わり、次の新しい飛躍の時代に入ったことを示している。

〔分離派と日本のＣＩＡＭ〕一九一〇年代には海外のアール・ヌーボーやゼツェッションの活動が新鮮な響きをもって伝えられるようになる。二〇年（大正九）東京帝国大学建築科を卒業する学生グループ、石本喜久治、堀口捨己、滝沢真弓、矢田茂、山田守、森田慶一ら六名は「分離派建築会」を結成し、激しい宣言文で当時の様式的な建築制作の風潮を批判し、創作を標榜した。分離派が実際的な活動に乗り出すのは二年後で、山田は東京中央電信局を、石本は東京朝日新聞社を、堀口は大正博覧会会場を設計した。当時のヨーロッパの表現主義の流れをくむ分離派は若い層に多くの同調者を得、分離派に続く「創宇社」（一九二三）や類似のグループが生まれた。これらはいずれもその活動の主体は展覧会や講演会であったが、建築家がこれまで手がけてきた大建築のほかに庶民住宅にも目を向け、合理主義的な方法と階級意識とを結び付けた点が注目される。一九三〇年（昭和五）ごろから動線という建築平面の人間の動態分析や、人体、家具の寸法、規格、住宅のマスプロといった問題も取り上げられるようになる。

一九二七年七月に京都の建築家を中心に「インターナショナル建築会」が結成された。この会は機能主義を目ざし、その綱領にあわせて「真正なるローカリティに根底を置く」ことを提唱し、その独自性と成果が期待されたが、実態は機能と合理性を追求するＣＩＡＭ（近代建築国際会議）を超えるものではなかった。

ヨーロッパのＣＩＡＭは個々の建築の造形よりも社会的な問題として建築を国際的にとらえようとする姿勢を示し、その第二回の会合では「生活最小限住宅」がテーマに選ばれた。ここにはル・コルビュジエに師事する前川国男、日本から山田守が参加して、日本の建築家もようやく国際舞台に登場し、インターナショナル・スタイルが本格的に日本に導入されるきっかけとなった。

こうした前衛的な思潮とは別に、銀行、会社などの民間商業建築は、古典主義やネオバロックなどさまざまな様式を消化しつつ、日本各地に広まっていった。

〔国粋主義の風潮〕和洋折衷と近代化の相克は避けて通れない問題であった。やがて民族国粋主義が台頭してくると、吉田鉄郎の東京中央郵便局（一九三一）を典型とする合理主義建築に対して、東京帝室博物館（一九三七、渡辺仁設計）、九段軍人会館（一九三三、川元良一設計）のように時代に迎合する風潮が建築界にも生まれる。こうした国粋主義の高揚期に来日したのがＢ・タウトで、彼は伊勢神宮や桂離宮などを賞賛することによって、伝統的な日本美への回帰を促進する役割を果たした。

日本の近代建築がこれから伸展しようとするやさき、一九三七年パリ万国博に出品した坂倉準三の日本館を例外として、戦時体制がその正常な発展を阻止した。個々の建築にかわって農漁村の住宅改善や都市計画が建築家の命題となったが、それは戦時中には実現されず、むしろ戦後の建築活動の源泉となった。そして、日本の近代建築運動は、第二次世界大戦の戦災によって戦前の二〇％に近い建物を失うという悲惨な結末をもって終わる。

〔現代〕戦時下に繰り返し行われた日本的デザインを模索するコンペに重ねて当選した丹下健三は、そのデザイン手法を戦後にも継承し、木造建築の構成と木割の美学から引き出した伝統美と近代合理主義が交錯する独自のデザインを生み出した。広島平和記念館（一九五二）や香川県庁舎（一九五八）がその代表で、一九五〇年代に展開された伝統論争に一つの頂点を築き、丹下のデザインは全国的な流行をみた。しかし彼はその後の日本の経済成長のなかで、これまでの「わび」「さび」的なイメージからくる「うつろいやすい伝統」はもはや克服すべきであると説いて、機敏に自らの変身を予感させていた。この変身は、当時国際的に造形主義的デザインが台頭し、ル・コルビュジエのロンシャン教会堂を先駆けとして、サーリネンのＴＷＡターミナル、Ｊ・ウッツォンのシドニー・オペラ・ハウス・コンペ当選案などが相次いで紹介された時期と符合している。

丹下はこのような海外の多彩な造形活動に呼応して、一九六四年（昭和三九）オリンピック施設の東京都屋内体育館で吊屋根のダイナミックな造形表現を示した。これは高度成長を達成した日本の象徴的な作品として国際的な注目を集めた。こうして一九六〇年代は現代技術の可能性を追求した丹

下健三、坪井善勝、前川国男、横山不学らの作品が注目される一方で、村野藤吾や白井晟一はこうした先鋭なモダニズムの時流とは一定の距離を保ちながら、独自の折衷的装飾性を巧みに昇華させ、村野は日本生命ビル（一九六四）、白井は親和銀行本店（一九六八）など、次々と新鮮な話題作を生み出していった。

一九七〇年代の日本の高度経済成長は全世界の注目の的となり、いまや欧米に追い付くのではなく、先進国の教科書なしに、世界に冠たる工業生産力と対比される生活環境の貧しさを抱えながら、自ら新たな展望を模索しなければならなかった。やがて一九七〇年の「進歩と調和」を掲げた大阪万国博覧会に突入していくのだが、すでに世界的な規模で脱工業化が進展し、人間疎外の克服、余暇への認識などが注目され始め、もはやこれまでのように工業化そのものを造形の理念とすることは成り立たなくなっていた。

すでに一九六〇年代から建築のデザインは多様化し、一人の建築家の作品も次々と変貌し、街にはつかのまの流行現象が目だってくる。こうした混迷現象を背景として、丹下門下の磯崎新は、これまで近代建築が背負ってきた「建築を社会改革の手段」とする重荷から建築を解放し、他領域の芸術との連繋を援用することによって近代建築の再生を図り、著書『建築の解体』によって若者たちに影響を与えた。一方、建築評論家長谷川堯は、村野藤吾を育てた様式の建築のもつ豊饒さへの回帰と、近代建築理念によって失われたものの大きさを訴え、『神殿か獄舎か』（一九七二）の著作によって戦前の洋風建築を再評価し、その全国調査を提唱した。

一九七〇年代なかばからの建築デザインの多様化と混迷はいまだに確たる展望をみいだしえないでいる。六〇年代においては丹下の系譜が普遍的で、村野の系譜は特異とされてきたが、大阪万国博以降は逆転し、工業生産を主軸とする高度経済成長型の発想に反省が求められるようになった。やがて磯崎はポスト・モダニズムの大作として筑波学園都市センター・ビルを発表する。これはルネサンスからマニエリスム、さらに現代建築の引用、もじり、反転といった手法で集大成された、きわめてユニークな表現として話題となった。

一九八〇年代初頭を飾る作品には反近代主義ともいえる新高輪プリンスホテル（村野）、レイト・モダニズムの赤坂プリンスホテル（丹下）がある。このほか、わが国現代建築のもう一つの動向として、近代建築と伝統が混在併存する大江宏の国立能楽堂など一連の作品の展開も見逃せない。さらに共生の思想を主唱する黒川紀章の内外での活躍と今後の展開も注目されるところである。

〈近江　栄〉

m 山口廣・村松貞次郎他著『日本の近代建築』（一九八一・環境文化研究所）▽日本建築学会編『近代建築史図集』（一九七六・彰国社）▽稲垣栄三著『日本の近代建築――その成立過程』全二冊（一九七九・鹿島出版会）▽太田博太郎・福山敏男他著『新訂建築学大系4Ⅰ　日本建築史』（一九六八・彰国社）▽福山敏男著『日本建築史の研究』（一九八〇・綜芸舎）▽太田博太郎著『日本建築史論集1　日本建築の特質』（一九七三・岩波書店）▽鈴木嘉吉編『国宝事典5　建造物』（一九八五・講談社）

日本語　にほんご

分布／共通語と方言／他言語との関係／位相／音韻／文字／文法／語彙／日本語の将来

日本民族により、日本列島において使用され、発達してきた言語の名。日本人は国語とも称する。その系統・起源としては、北方の言語である「ウラル・アルタイ語族」とする説、南方の言語である「マライ・ポリネシア語族」とする説、その両者が重なり合ったとする説、英語、ペルシア語、インドの言語などを起源とする説など多数あるが、いずれも学界全体の合意を得たものはない。周辺の言語の古代語の資料が乏しいから、この面の研究の進展は非常に困難であろう。

〔分布〕本州・四国・九州・北海道・沖縄およびその属島、すなわち日本国の領土全般に広く行われており、しかも他の言語と競合併存することがない。ただし、明治末期から第二次世界大戦の終わりまでは、日本国の領土であった台湾・樺太（サハリン）・朝鮮にも、住民全体に日本語教育が行われた時期があった。海外に移住した日本人の間でも行われるが、三世以下に伝えられることは少ないとみられる。また、外国人に対する日本語の教育・普及は貧弱である。現在、日本語を話す人口は約一億二〇〇〇万人で、英語、中国語、ロシア語、スペイン語と並んで世界の大言語の一つに数えられるが、国際性はかならずしも豊かでなく、今後の対策が要請される。→日本語教育

〔共通語と方言〕日本語には、権威ある公的機関としてその規準を示すものはないが、現代の口語については、国語審議会（文化庁所管）の審議・答申があり、それに基づいて公布される内閣訓令・告示があって、公用文の表記はだいたい統一された内容を備えている。それは、人名の命名についての法律にも関係している。一方、小・中・高校の教科書は文部省の検定を経ているが、それも右と同じ規制によっている。新聞・雑誌などもこれを規準とするものが多く、現代の日本語の表記形態は、だいたい統一の状態を保っているといえる。また、話しことば（口頭言語）は、ラジオ・テレビの普及によって、東京の中産階級のことばを基にした共通語が全国に広まっている。全国各地に方言が分立しており、本土方言と沖縄方言とに二大別され、さらに本土方言は東日本方言、西日本方言、九州方言の三つに分かれる。それぞれの間に音韻（アクセントも含む）対応の法則があり、文法についても法則的対立が顕著である。語彙は、地域による個別的差異が多くみられるが、それらのなかで、古代、中世、近世において中央で行われていたのに、現在では用いられなくなってしまったものが、地方に残存している例が少なくない。この種の現象は、語彙ばかりでなく、音韻や文法についてもしばしばみられる。

日本語の方言の歴史は、資料が乏しくて、あまりはっきりしたことはわかっていない。ただ、八世紀には、東国（だいたい、現在の静岡県以東辺）には、当時の都のあった大和（奈良県）地方とは異なった東国の方言があって、音韻、文法、語彙などのうえで、大きな相違があったらしい。その後、一六世紀の末ごろには、東国方言や九州方言が中央（京都）のことばと対立していたことが知られるが、その間の数百年間のことは、ほとんど不明である。江戸時代には封建制度が発達して、各地に領主が封ぜられ、しかも中央（江戸）との間に参勤交代その他の交流があったために、諸国の方言が比較観察される機会が多くなった。当時すでに現代のような諸方言が存在したことが推定される。方言は話者の郷土意識や地域社会の構造と関連が深く、方言コンプレックスの問題などもあるが、今後、共通語の普及や、他方では地域社会の独自性の振興など、種々の要素が絡んで、対処すべき問題が少なくないことと思われる。→方言

〔他言語との関係〕日本語は、他の言語との間の相互関係において歴史的にみてあまり深刻な事態を経験しなかった。日本列島は、地理的に大陸から孤立していたために、政治的に

侵略されたことがまれであり、それに伴って、日本語が強制的に禁止されたり、圧迫されたりしたこともなかった。したがって、有史以来の日本語は、主としてそれ自体のなかでの変化を遂げたのであり、他国語から受けた影響も部分的に語彙の面などに限定されており、音韻については若干の影響もみられるが、文法などの面では、古代語の特徴が亡失せずに現在まで残存している面が多い。

一方、日本文化全体として、古代においては中国に、近代においては欧米諸国に範を仰ぎ、それから多方面にわたって文化的事象の輸入摂取に努めた。このことと呼応して、言語の面でも、古くは中国語から、近くは英語その他のヨーロッパ諸言語から、多数の語彙を借り入れ、また音韻の面でも、若干それら外国語からの影響を被った点がみられるが、文法に至ってはあまり顕著な影響はみられない。北方においては、古くからアイヌ民族との接触があって、コンブ（昆布）、ラッコ（猟虎）などのアイヌ語が日本語に入ったものがあるが、逆に日本語からアイヌ語に入ったものも多いといわれ、相互の系統的関係については、いまだ十分に解明されていない。また、朝鮮語（韓国語）とは、古代以来の接触があったと考えられ、同じ系統とする説も従前は多く唱えられた。確かに文法構造や音韻体系のうえで認められる共通点も少なくないが、語彙の対応例などがあまりにも貧弱であり、現在では同系を証するには不十分とする説が有力である。朝鮮語から日本語に輸入された語には、チョンガーなどわずかなものがある。逆に日本語から朝鮮語に及ぼした影響として、日本製漢語の流入が多かったといわれる。

これらに比べ、中国語からの影響は、おそらくもっとも大きいものであろう。それは、千数百年の長い間、日本は中国を文化の源泉と仰いできたことによる。古く八世紀ごろから、すでに相当に多くの中国語の単語（漢語）が借用されていたらしいが、一〇世紀ごろには、仏教関係の用語や、輸入された調度品の類をはじめ、「けさう（懸想）」「げ（宜）に」「ぐす（具す）」など、抽象的概念を表す名詞や、副詞・動詞にまで及んでいたらしい。漢文を訓読するときや、漢詩文を作文するときなどには、さらに多数の漢語が使用されたが、中世以降、漢文の勢力が口語のうえにも文章のうえにも強くなるに伴い、漢語の比重はいよいよ増大していった。さらに、中国から新たに禅宗が輸入されるに伴い、以前よりは新しい時代の発音による漢語（唐音語）が流入した。中世末期のキリシタンおよび江戸中期以降の洋学の発展の際にも、ポルトガル語、オランダ語その他の西洋諸語が取り入れられたが、原語のままの形で入ったほか、漢語の形に翻訳されたものも多く、ことに明治以後にはその傾向が顕著であった。

第二次世界大戦後は、アメリカの文化の影響によって、英語を主とした借入が著しいが、この際には原語のままの形で、名詞はもとより、「スタートする」「デリケートな」など動詞・形容動詞の類にまで及んでいる点に特徴がある。しかし、外来語は体言的に扱われるのが原則で、それは古代の漢語借用以来の日本語の文法的性格を崩さずに維持しているとみることができよう。→アイヌ語　→外来語

〔位相〕 言語位相の多様さは、日本語の特徴の一つであろう。現代では書記語は会話語との差は小さいが、それでも語彙・文法の点で若干の隔たりがある。しばらく以前までは、正式の書記語は、会話語から甚だしく異なった用語が用いられ、文語体とよばれたが、それは西暦一〇世紀ごろの日本語を基にして構成され、その後伝統的に一〇〇〇年ほど用いられた言語である。この文語体に対して、口語体とよばれるものは、現代語に基づくものであり、それぞれ文語文法・口語文法という別個の体系を備えている。文語のなかにも、さらに和文体、漢文訓読文体、和漢混交文体、書簡文体などの別があり、使用される場面によって使い分けられてきた。また、おもに学者・僧侶などによって、漢文・漢詩が使用された。これは、本来、外国語としての文章であったが、学問的著作や教養の表現として、古くからそれらの階級のなかでしばしば行われていた。一方、口語体のなかでも、会話と文章とでは相当程度の違いがあり、会話語では、話し手と聞き手との関係によって、敬語を使う場合と使わない場合とのどちらかが選択される。文章語のなかでも、常体（デアル体）と敬体（デス体）との区別があるが、これは読み手に対する関係ではなく、論説・文芸作品など、文章のジャンルによって使い分けられるもので、一般には常体が用いられる。

階級・職業による相違についてみると、古代から近代にかけては、各時代ごとに種々の階級語・職業語などがあったようで、中古・中世には、伊勢神宮などの祭祀に関する人々の間に用いられた特殊な用語や、女性貴族や宮廷の女官だけが使った特別のことばなどがあった。ことに近世になると、封建的社会制度の確立によって、武士・農民・工人・商人の社会的差別が強く行われ、それに伴って、武士階級の言語と農民などの言語との間に、際だった差異が生じたと思われる。このほか、遊里には、そこだけの独特の言語が行われたという。明治時代以後には、そのような階級的差別はいちおう撤廃されたものの、なお、官吏・軍人などと商人・職人などとの間には、若干の差異が存した。それも、第二次大戦以後には、社会の変革に伴って急速に減少し、社会・職業による言語の差異は、しだいに小さくなって、全体として均一化の方向に進んでいるとみることができよう。

〔音韻〕 日本語の標準的な音韻の体系は、だいたい次のように整理される。

発話（文）は、その息の切れ目によって文節に分析され、文節はさらに音節に分けられ、音節はさらに単音に分けられる。単音には子音と母音とがあるが、子音のうち、jとwとは母音に近い性質も備えていて、半母音ともよばれる。日本語では、音節という単位が重要で、古来これが強く意識され、平仮名も片仮名も、これを単位として製作された。別表（⇓10）に片仮名とローマ字（音韻の記号）とで日本語の音節を示す。このなかには、漢字音だけにしか使われないもの、外来語だけにしか使われないもの、ミャのようにクを伴って「ミャク」という形でだけしか使われないもの、その他使用の範囲が限られているものなどがある。

開音節が中心をなす性格は、日本語の諸方言にわたって存在するが、この性格は有史以来大きな変化を遂げていない。例外として、はねる音（撥音、ン）やつまる音（促音、ッ）（音韻論では、それぞれ /N/、/Q/ などと表記される）があるが、いずれも九世紀以降に新しく発生したものであり、これらは拗音（キャ・シュ・チョなど）とともに中国語音の影響と説かれている。

八世紀までの日本語では、母音の種類が現在よりも三種多い八種が区別されていたと一般に考えられており（近時は理論上それを否定する見解もある）、古くキ・ケ・コ・ソ・ト・ノ・ヒ・ヘ・ミ・メ・モ・ヨ・ロの一三の仮名について、語によってそれぞれ二種の使い分けがなされていた。八世紀後半からその区別がなくなり始め、九世紀のなかばごろにはいまと同じようになったとみられる。また古くはア行のエeとヤ行のエje（ye）との区別もあったが、一〇世紀なかばごろからjeに統一された。また、ハ行音は古くpa、pi、pu、pe、poであったという説があるが、これは琉球方言の一部に残っている発音その他によって推定したもので、確実ではない。八世紀ごろにはφ（F）の子音になっていたかといわれる。そのφも、一〇世紀末ごろから語中・語尾ではwに変化して、φはわずかに語頭だけに残ったが、さらに一七世紀以後には、それもhに変わった。サ行音の子音については不明な点が多いが、サはtsa、ソはtsoであったかといわれている。タ行音は古くはta、ti、tu、te、toであったとされ

る。その他の音節の音価は、古くから現代と同じか、または同類のものであったらしい。一六世紀の末ごろには、pがあって促音の次におこることがあった。

中世末以降、ヨーロッパ諸言語からの借用語が生じ、それらのなかで使われる音として、ミュ・スィ・シェ・ティ・ファ・フィ・フェ・ヴァ・ヴェなどの音節が生じたが、ティ・ファなどは、古く国語にあった音で、それがのちに ti>tʃi、ɸa>ha のように転じたあとの空隙を埋めたものである。子音には、k, g, s, ʃ, z, ʒ, t, tʃ, ts, d, dz, dʒ, n, h, ç, ɸ, b, p, m, j, r, w などがあり、このうち j, w は半母音ともよばれている。母音には a, i, u, e, o の五種が標準的だが、u の音声など、東京方言では ɯ、関西方言では u などの区別があり、また i と u との区別をしない場合をもつ方言、琉球方言のように a, i, u の三種だけの方言など、若干の揺れがある。しかし、開音節が中心をなす点はだいたい諸方言を通じていえることである。

アクセントは、音節単位の相対的な高低を備えた、いわゆる高低アクセントであり、関西式、関東式、一型の三種に大別され、諸方言の間にいわゆる「型の対応の法則」がみいだされる。この法則は、現代語のなかばかりでなく、同じ京都方言のなかでも、現代、近世初期、平安時代末期という、歴史的な面でも存在することが証明されている。なお、日本語のアクセントの歴史は、平安時代末期（一二世紀ごろ）の状態が体系的に知られているが、それ以前のことは断片的にしか判明しない。そして、中世以後の変化の状態も、かならずしも明確でないが、近世初期の体系を得る資料が知られている。しかし、これらはいずれも京都方言の体系であって、現代の諸方言に存する三大別が、歴史的にどのような相互関係にあったのかについては、諸論があるが、いまだ定説を得るに至っていない。→アクセント

〔文字〕 現代の日本語に使用される文字には、漢字と平仮名と片仮名との三種があるが、このうち主として使われるのは漢字と平仮名とであって、片仮名は補助的な役割を果たしている。このほか、ローマ字、ギリシア文字などが使われることもあるが、特殊な場合に限られる。右のような使用状態は、最近三〇年間くらいのことで、第二次大戦の末までは、憲法・法令など公用の文書は漢字と片仮名との混用で書かれることが多かった。江戸時代までは、漢字だけの文章がもっと多く行われていた。もともと日本には、本来の文字はなかったのであり、神代文字などと称して、古代の日本から独特の文字があったという説は、後世の人々の捏造である。

日本人は、大陸からの漢字の伝来によって初めて文字を知ったと考えられる。その時期は明らかでないが、すでに五世紀の初めごろには、日本において漢字を使って文章をつくり、またそれを使って日本語を表音的に書き記したりしていた。平仮名・片仮名は、漢字の表音的な用法（万葉仮名）に基づいて、その字体を簡略化したり、または字画の一部分を省略したりして創案した文字で、日本の宮廷の書記や寺院の学僧などによって、九世紀初頭以来使用された。平仮名は一〇世紀の末ごろにはひととおり完成して、その後は書道という美術的な要素も加味されて複雑化したが、片仮名のほうはまったく実用性だけで発達し、一二世紀ごろまでにだいたい完成した。平仮名は最初から独立して、または漢字と併用して使われたが、片仮名は最初は主として漢文の訓点の記入のために、その補助的な符号として使われた。他方、漢字と併用されることも早くからおこり、やがてその用法が盛んになるとともに、片仮名だけが独立して使われることも生じた。だいたいにおいて、平仮名は文学作品や婦女子用に、片仮名は漢文を中心とした学者・僧侶など男性の世界で使われることが多かった。

仮名の字母表としては「いろは歌」が行われた。主として平仮名で記されたもので、「いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす」の四七文字である（このほか、末尾に「ん」や「京」を加えることもある）。諸行無常を述べた仏経の誦文に基づいたものといわれ、弘法大師空海（七七四―八三五）の作と信じられて、広く行われた。ただし、この歌の成立年代はたぶん一〇世紀中ごろ以後であって、空海の作であるとは信じられない。歴史的仮名遣いも、この歌にみられる字母を基にして定められ、以前は辞書の語順その他に広く用いられたが、「現代かなづかい」のなかで「ゐ」「ゑ」の二字がなくなったため、現在ではこれを知らない人も多くなった。一方、五十音図（アイウエオ）は、本来音韻学の世界で考案された図表であるが、のちには字母表のようにも考えられるようになり、最近では、辞書の語順はもとより、順序や列挙の表示などにも広く用いられている。吉備真備（六九三―七七五）の作というのは妄説で、一〇世紀末ごろの仏教の僧の作とみるのが穏当であろう。

ローマ字は中世末にヨーロッパから渡来し、一時はその活版印刷による出版なども行われたが、キリスト教禁圧のために滅びた。しかし、その後、オランダその他の西洋諸国との交渉に伴って、近世の中ごろ以後、蘭学などの洋学がおこり、そのなかでローマ字も使われたが、一部学者の間だけであった。明治以後は、欧米との交流が盛んになって、外国語学習なども普及し、漢字や仮名のかわりにローマ字で日本語を表記することを企図する運動も起こった。明治初期以来、漢字を廃止して平仮名または片仮名だけで国語を表記しよう

日本語／音節

ア	イ	ウ	エ	オ					
a	i	u	e	o					
カ	キ	ク	ケ	コ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ka	ki	ku	ke	ko	ga	gi	gu	ge	go
サ	シ	ス	セ	ソ	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
sa	ʃi	su	se	so	za	ʒi	zu	ze	zo
タ	チ	ツ	テ	ト	ダ			デ	ド
ta	tʃi	tsu	te	to	da			de	do
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ					
na	ni	nu	ne	no					
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	バ	ビ	ブ	ベ	ボ
ha	çi	ɸu	he	ho	ba	bi	bu	be	bo
					パ	ピ	プ	ペ	ポ
					pa	pi	pu	pe	po
マ	ミ	ム	メ	モ					
ma	mi	mu	me	mo					
ヤ		ユ		ヨ					
ja		ju		jo					
ラ	リ	ル	レ	ロ					
ra	ri	ru	re	ro					
ワ									
wa									
ン	ッ								
n	ɔ								
キャ	キュ	キョ			ギャ	ギュ	ギョ		
kja	kju	kjo			gja	gju	gjo		
シャ	シュ	シェ	ショ		ジャ	ジュ	ジェ	ジョ	
ʃa	ʃu	ʃe	ʃo		ʒa	ʒu	ʒe	ʒo	
チャ	チュ	チョ							
tʃa	tʃu	tʃo							
ニャ	ニュ	ニョ							
nja	nju	njo							
ヒャ	ヒュ	ヒョ			ビャ	ビュ	ビョ		
ça	çu	ço			bja	bju	bjo		
					ピャ	ピュ	ピョ		
					pja	pju	pjo		
ミャ	ミュ	ミョ							
mja	mju	mjo							
リャ	リュ	リョ							
rja	rju	rjo							
クヮ					グヮ				
kwa					gwa				
スィ					ズィ				
si					zi				
ティ	トゥ				ディ	ドゥ			
ti	tu				di	du			
ツァ		ツェ							
tsa		tse							
ファ	フィ	フェ	フォ		ヴァ	ヴィ	ヴェ	ヴォ	
ɸa	ɸi	ɸe	ɸo		va	vi	ve	vo	

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com